

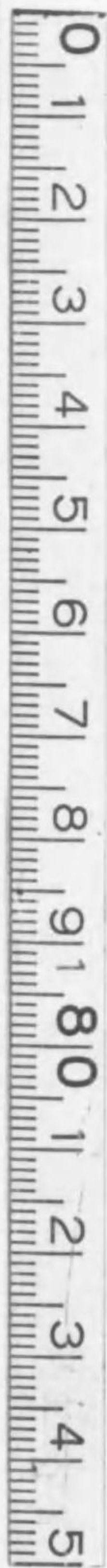
特 259

822

5/4

江松吉千能  
口風野静年野

九



始





特259  
822

坂戸金剛拾  
九代右近氏  
但遺稿據二  
拾三代右京  
氏慧心鈔校



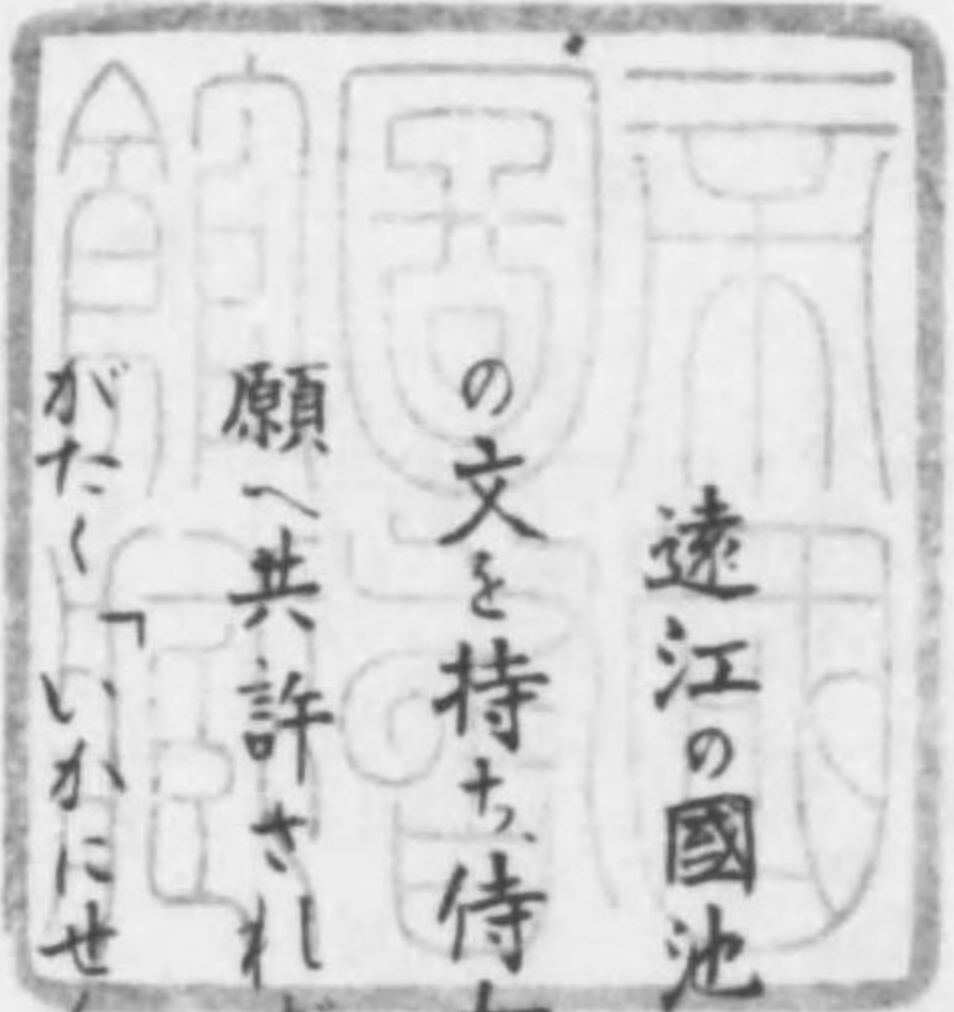
熊

野

梗概

(所) 京都

(季) 三月



遠江の國池田の宿の長熊野は平宗盛に召され都に在りしが古郷の病母より  
 の文を持ち侍女朝顔が迎ひに上りければ其由を申しひたすら歸國の暇を  
 願へ共許されず此春の花見んとて清水寺へ伴はれけりされど母の上忘れ  
 がたくいかにせん都の春も惜しけれと馴あづまの花や散らん」と詠みし

かは宗盛衰に思ひ終に暇をあたへければ熊野は嬉しく古郷へと急きけると  
 なり。





熊野(本三番目)

役別	装束	附
シテ熊野	面孫次郎 鬘 鬘帶 着竹箔 唐織 扇 短尺袂入ル	
シテツレ朝顔	面小面 鬘 鬘帶 着竹箔 唐織 文徳巾ス	
ワキ平宗盛	黒風折烏帽子 着竹厚板 白大口 長絹 腰帶 扇	
木刀持一人	素袍 男	
作物	花見車	

熊野

<sup>位</sup>是<sup>見</sup>平の宗盛也。おもき江の淵  
 池田は宿の長とハ熊野とヤレ。  
<sup>ト</sup>久〜〜とめを母の芳  
 ちりとヤレて度々<sup>タビ</sup>暇を<sup>イハ</sup>と<sup>コヒ</sup>ハカ。  
 け春斗りハ花見の供と存<sup>イハ</sup>イハ。



喉を<sup>イ</sup>おき<sup>イ</sup>げん。  
し<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>け<sup>イ</sup>る

お前<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>事<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>ち<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>

さ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>し<sup>イ</sup>  
畏<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>ら

あ<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>間<sup>イ</sup>惜<sup>イ</sup>し<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>春<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>き<sup>イ</sup>や<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>

さ<sup>イ</sup>く<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>守<sup>イ</sup>ね<sup>イ</sup>ん<sup>イ</sup>  
ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>

ま<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>國<sup>イ</sup>池<sup>イ</sup>田<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>宿<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>長<sup>イ</sup>者<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>

朝<sup>イ</sup>鳥<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>女<sup>イ</sup>に<sup>イ</sup>て<sup>イ</sup>結<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>  
お<sup>イ</sup>も<sup>イ</sup>

池<sup>イ</sup>田<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>宿<sup>イ</sup>は<sup>イ</sup>長<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>慈<sup>イ</sup>野<sup>イ</sup>と<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>な<sup>イ</sup>女<sup>イ</sup>

盛<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>召<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>並<sup>イ</sup>れ<sup>イ</sup>給<sup>イ</sup>ひ<sup>イ</sup>久<sup>イ</sup>あ<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>

と<sup>イ</sup>侍<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>ぬ<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>を<sup>イ</sup>母<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>い<sup>イ</sup>さ<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>ら<sup>イ</sup>ま<sup>イ</sup>

次<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>卵<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>ち<sup>イ</sup>入<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>経<sup>イ</sup>ふ<sup>イ</sup>け<sup>イ</sup>度<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>朝<sup>イ</sup>鳥<sup>イ</sup>が<sup>イ</sup>

道<sup>イ</sup>に<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup>り<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>上<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>足<sup>イ</sup>乃<sup>イ</sup>慈<sup>イ</sup>野<sup>イ</sup>女<sup>イ</sup>の<sup>イ</sup>











を母の心よつらば

よせしちかみよみいふことなき

何とを母の心よつた文とぞや

諸君よ談ゆー (文の段) 上 車泉殿の

春は秋の愛心を碎く端となり

躑躅山宮乃秋の秋は月終りあり

志も北を東世一代愛りの如き  
毛生死の境と道れありむらふ  
二月乃時如くふ何とやらんけ  
春は年ふり増る朽木揃今母針  
の花をたよ待もやせと心弱き  
をけ常あふりも潤は周ぶをり















て花の香くる事早し。秋後も霜  
雪うしてあふまふはし。山郭子山有て  
山を中道多うして道極り  
な。 女。 子。 着。 へ。 白。 く。 して。 ぬ。  
来去す。 人。 樂。 し。 人。 愁。 ぶ。 是。 皆  
世の上の有様なり。 中。 誰。 け。 云。 し。

小  
説

春の色。 宴。 長。 深。 なる。 東。 山。 上。 四。 條。  
み。 條。 乃。 橋。 の。 上。 女。 若。 男。 女。  
中。 淺。 部。 鄙。 多。 あり。 花。 衣。 神。 を。 連。 ね。  
て。 行。 末。 の。 花。 衣。 神。 を。 連。 ね。  
え。 咲。 九。 重。 花。 盛。 名。 あり。 春。 の。  
花。 衣。 神。 を。 連。 ね。 上。 花。 衣。 神。 を。  
花。 衣。 神。 を。 連。 ね。 上。 花。 衣。 神。 を。



ふらふらと遠くへの道もなく車大路  
やら彼程乃地を豊土よと伏すむ  
親きも同座あり菊は救世の方便  
強ふらちねを守り給くや  
実や守りの末は頼む命は白玉  
の道も若くも赤くもぬら道の辻と

日上

上女

名実怖しやけ道は真途  
通ふなる物を心やそる山  
煙の末も海を渡る声も旅屋の横  
だたる北斗は星の星のなま  
御法の花も咲くなる  
そらちめを守

日上

日上

日上

下女



ぬあつら子安の塔をさびら上女まの  
涼ゆく駒の道日をや程もなく  
是そけヤ車舎日上馬待め  
下 爰よつちも車ありあは衣ざりま深  
飾磨のかちあまシカ乃佛のち  
茶よ志補して母の形替をやかさん

下しん女南や大慈大悲の親世を母よ  
なせそたびコト誰か  
太カ拵 茶よコト然聖コト河原コト者ぞ  
太カ拵 茶よコト清堂コトふぶ座コトの  
かせ 畏ていふふコト上掬ハ  
地主は死の下にシユ座ゆひては酒宴乃











青かじし露の秋又露の春の清水  
の唯救めさむき一かきこころの  
を盛<sup>ウツ</sup> 空の若れ<sup>ウツ</sup> 桐<sup>キ</sup> 厚のむれ<sup>ウツ</sup>  
深き情<sup>ナカ</sup>を人<sup>ヒト</sup>や志<sup>シ</sup> ね<sup>ヒメ</sup> しく<sup>ウツ</sup>  
なれ<sup>ウツ</sup> 何<sup>ナニ</sup>に<sup>ニ</sup> 欲<sup>ホシ</sup>め<sup>ウツ</sup> しく<sup>ウツ</sup>  
舞<sup>マユ</sup>と<sup>ト</sup> 恋<sup>コイ</sup>め<sup>ウツ</sup> しく<sup>ウツ</sup>

コトハ ステル

中<sup>ナカ</sup>の事<sup>コト</sup> 中<sup>ナカ</sup>の舞<sup>マユ</sup> な<sup>ナ</sup> 今<sup>イマ</sup>の

村<sup>ムラ</sup>あ<sup>サメ</sup>よ<sup>サメ</sup>の<sup>サメ</sup>あ<sup>サメ</sup>い<sup>サメ</sup>ふ<sup>サメ</sup> 今<sup>イマ</sup>唯<sup>タダ</sup>今<sup>イマ</sup>

急<sup>ムラ</sup>ぬ<sup>サメ</sup>に<sup>サメ</sup>お<sup>サメ</sup>れ<sup>サメ</sup>救<sup>サメ</sup>は<sup>サメ</sup> 意<sup>イ</sup>情<sup>ニガク</sup>の<sup>サメ</sup>あ<sup>サメ</sup>や<sup>サメ</sup>ハ

今<sup>イマ</sup>迄<sup>マデ</sup>に<sup>マデ</sup>盛<sup>ウツ</sup>と<sup>ウツ</sup> 花<sup>ハナ</sup>を<sup>ウツ</sup> ち<sup>ウツ</sup>ら<sup>ウツ</sup>ま<sup>ウツ</sup>は<sup>ウツ</sup>

意<sup>イ</sup>こ<sup>ウツ</sup>ら<sup>ウツ</sup>な<sup>ウツ</sup>の<sup>ウツ</sup>む<sup>ウツ</sup>ら<sup>ウツ</sup>さ<sup>ウツ</sup>あ<sup>ウツ</sup>や<sup>ウツ</sup>あ<sup>ウツ</sup>春<sup>ハル</sup>あ<sup>ウツ</sup>の<sup>ウツ</sup>

春<sup>ハル</sup>雨<sup>アメ</sup>の<sup>ウツ</sup>海<sup>ウミ</sup>に<sup>ウツ</sup>渡<sup>ワタ</sup>ら<sup>ウツ</sup>あ<sup>ウツ</sup>ら<sup>ウツ</sup>あ<sup>ウツ</sup>こ<sup>ウツ</sup>こ<sup>ウツ</sup>横<sup>ヨコ</sup>

カ

カ







又... 道... の... 山... 花... 又... 残...

千手

梗概

(所)相模國

(季)三月

三位中将重衡は清盛の五男にて、生田の森の戦には副將軍たりしが  
 一の谷にて敗れ、鎌倉に囚はれとなりしかば、頼朝は狩野介をして之れを護ら  
 しめ、又手越の長の娘千手といへる美姫をおくりて慰ませめさせたり。狩野介  
 は雨中のつれづれに酒を持ち千手は頼朝の旨をうけて琵琶琴を持ち  
 伺候する。重衡は千手をして出家の望みを頼朝に傳へ置きけり。朝敵と  
 て許されざればかひなき身を歎きけるを、狩野介千手と共に酒をす  
 めいろくと慰め居たりしが、重衡は又都へ送らるゝに千手は涙と共に、  
 あかぬ袂を介ちけるとたう。



千手 (本三番目)

ワ キ宗 茂	シテツレ 重 衛	シ テ 千	役 別
		手	
梨子打鳥帽子 着附厚板 大口直垂上下 白鉢巻 短刀 扇	放髪 着付色無厚板(唐織) 大口腰帶 袷袢 扇	面探次郎 髷 髷帯 着付袴 唐織着流 扇	装束附

千々

<sup>コト</sup>柳是、謙倉殿の御内よ仕中。  
 将軍の女宗茂にては、扱もね玉の  
 子之位に申將、主衛の郷ハ、因人と  
 成あひ、在謙倉まで、お座ゆを、某、  
 カて、いようく、<sup>イタ</sup>芳、り、かせとの、事



によりの。昨日も湯をうきやが如よ。  
あ介借子子母の氣を遣をされ  
ていかに子母は茶と中へ吐  
娘成が後子絶くゆるより  
の心身近くは使われを是く遣はされ  
ゆ事。城子有難き心志にては今日ハ

雨中にては酒を勤めや  
の郷を念めやと好む  
現今は春流へとたづろ  
これや何のまや成らん  
春の花は樹は冬は秋の月  
水底は流むも世のたうかよの者



とらふていしん長やなま傷の其古くハ  
雲の上をかきしよきならぬ身の新情  
浪は遠し船は遠きならさよも人の  
与怨ならで者よ入る恨はうらね  
たふだももともあぬは涙あるを別  
くやキヤヤ上陸奥の思ふは境ぬ

雨のききくはきききききききききき  
きききききききききききききききき  
花もきききききききききききききき  
までもきききききききききききききき  
いふ誰か入ら海を渡りぬぞ  
を。子もまよふおの思ふにいてい



あつたる由の中へ  
まよひ侍り

重傷  
の機嫌を以て披露中さうずらして  
身は是様死一日の深命の蟬の  
定めなきに似たり心は換武が胡玉  
捕をれ山名宿の肉ふら就られて  
君をいとしをれぬをいし  
まの廣利が

謀斗にて敵を亡り  
我の川となし  
累世の責をいふ  
限ならんあらん  
いふ上の子まよひ  
何子まよひ

重傷

重傷



成なりとも今日けふの對面たいめんにまはるゝ由  
ふらふら海うみへまりて 畏おそふらむ  
心こころまはりし由よし披ひきりかてるに行いく思ひを  
まはらん々らのち對面たいめんにまはるらむ由  
作なすらむも私わたしよららまさる雨あめの  
中なかを耐めせるの難がたなるの由よし

よして親親おやぢ色いろ見みる持持もたせる由はし由よし  
をはりてはしからしめる由をはりてはしからしめる由  
なまえかはりまはるにては 此この後の難がた  
子こまはらぬよかてる由よしも私私わたしよらまさる由はし由よし  
雨あめの中なかを耐めせるの難がたなるの由よし  
作なすらむも私わたしよららまさる雨あめの



小  
説

ようくは後へいさ事なまじり  
 唯だぬいと清すじ女 上 その時  
 子まらまらりて 日 妻をわらわ  
 と押戻ぐ御簾の追尾自ひま  
 花の都人よ花うあからん  
 実や東の果やまて人のむれ果オク

書  
摘

深き其情を都なまじり花の春  
 紅葉の秋たが思ひあふぬらん  
 いふ子まてあの日あからん女  
 かなうが家の暇な事まらぬ  
 かなうをむく 女 由かてぬ  
 心身ハ朝敵の事なまじり



お家と許し合はせぬお家  
と我を結らひて<sup>ト</sup>毒も此の肉  
推さるまゝ<sup>ト</sup>あらせし<sup>ト</sup>程おまぐと  
中<sup>ト</sup>あらせして<sup>ト</sup>我を<sup>ト</sup>かひ<sup>ト</sup>な<sup>ト</sup>死  
お家の心<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>割<sup>ト</sup>く<sup>ト</sup>我を<sup>ト</sup>か  
口惜や我一の谷よ<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>お<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>れ

主御

身の生捕ま<sup>ト</sup>ぬよ<sup>ト</sup>言<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>な<sup>ト</sup>ら<sup>ト</sup>ん  
今又東北果<sup>ト</sup>迷<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>森<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>あ<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>を  
さら<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>車<sup>ト</sup> 糸<sup>ト</sup>世<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>靴<sup>ト</sup>ひ<sup>ト</sup>とい<sup>ト</sup>ひ  
ながら又思<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>心<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>父<sup>ト</sup>命<sup>ト</sup>ふ<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>も  
佛<sup>ト</sup>像<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>て<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>壽<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>迷<sup>ト</sup>ち<sup>ト</sup>し  
現<sup>ト</sup>當<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>罪<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup>深<sup>ト</sup>ま<sup>ト</sup>車<sup>ト</sup>い<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>業<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>る<sup>ト</sup>











三人

唯今詠イ子ラ朝詠ハ亦カなくも  
小母コのハ作サび詩シを詠カせバ少ウ人ニ遊ブ也  
守モるベしト世セにシてハ誓チひナり  
がらシ重シ衝クハ今イ生ケのウ守リとナり

三人  
唯ト来キ世セのハ縁ヰりハ我ガ少カのマりハなれど  
宣ノしたハ毒クサ御ミを取り上十ツ悪クと  
ワラハ  
オセ  
ウケタマ

いハまシにハ精シをと日ハ朝ア詠ハてそ

かハあシでケるハ扱メもハ彼カを重衝ク

おハ玉タのハ末シ子コとハ中ナせトもハ先ハ身ミ

小ハもハ勝カを一心ニもハ裁キえテ父ハ母ハの

究ハ小ハを一限ニりハ女メ上ニされハ時ハ終ル

身ハ家ハのハ運ハ命ハ悪ク日ハ洗ハをハ死ス



物モノはハらラ産ユまマてテ 婦メやヤ牡シ麻カはハの  
 國クニ乃ハ生ナ田タはハ川カハはハ身ミをヲ捨スてテ 防フ銭ゼンをヲ  
 中ナカせシたタ シメテ 表ウラのノ下タ月ツキ未ミはハ葉ハのノ表ウラ  
 日ヒ下タ オト 露ツキされレけレらラとト衣キれレたタまマ キリ  
 今イマはハ持テらラよヨしシちチらラなナ アまマ衛ヱもモ  
イカカむムとトすスらラにニ イツツカカタ ア細ホとト アまマたタるル

如ニくクふフてテ 遊ウれレ兼カるル 從ユ醒ゼのノ生ナ捕ト  
 まマつツ河カ越エのノまマ房フがガまマにニわワたタるル  
 心ココロのノ糸イトはハ入イリニ 上女メ ウ実ミやヤ世セの中ナカにニ  
 日 ウ定サめメたタまマ ウ神カミをヲ月ツキ時トキ毎ツふフおおくく  
 奈ナ良ラ坂サカやヤ シ流リ徒タのノまマ ウ後ノチりリああをを  
 とといいふふ角ツノもも ハ深コいいせせでで ウ又マタ謙ケン念ネンにニ



渡さるゝ後ハ何もそハ橋にき井の  
都つゝ又ニ河の國やき江ホタフジ足柄ホタ  
箱根おきてゆふやそらん星月  
牧謙倉山よ入り六基又限りごと  
おりひに別れハ後も思ひ移り  
哀れ者と思ひ妻の灯火くらふ

日  
してハ救新彦氏ハ渡の雨と頻る  
救の空ニラニ四面ハ村々ハ寺の内テ  
何とら思ひ者の神思ひの色も  
おぬらん後と縁ておらまも雪の  
あかしの枯てたまは花咲子よこれ  
神ならんを祀りしやあなさん



下 忘れぬや 序 舞 上 しと女 一樹の陰や一ひのれ水  
 日 皆是地生の縁といふ白拍子をとて  
 観ひける 主衛 生時を衛奥よ業  
 一 琵琶をとりあせ強  
 弦を又玉琴今の緒合よ  
 合せて聞けば 日 上 山嵐の松風  
しと女

一 海ひ来にきり琴を枕の縁敷乃  
 一 うち縁をなほ寝たし東雲もほの  
 一 不のとぬ渡る空に しと女 影つらや  
 一 成ぬき 上 日 浅るや成なん  
 一 河原を止給ふ心かの内を痛  
 一 き お 上 新て室衛勅より お



又於よと有る武士身護一が  
 強へシツメ子も信じたち出デ  
 何中ワケ此其契りもやまぬニ  
 離るハ神と神との霧洞ニ糸  
 重ウカズ徳の者極目もあてらまぬ  
 今ケ又シキなク

吉野静

梗概

(所)大和國吉野山

(季)十一月

源義経は梶原景時の讒言により兄頼朝の勸氣を受けたれば詮方なく都を落ちて一先大和國吉野山を頼み籠り居たりしが吉野山の衆徒ども心變りして鎌倉方に靡きければ止むなく又此山を披く事となりたり此時佐藤忠信は唯一人後に止まり居たりしが猶速く落ちのびさせんが為に都道者の姿となり衆徒の席に入りて問答に時を移させ静は舞の衣裳を身にまとい講堂に入り込み法樂の舞をまひなどする隙に義経は難なく落行きければ兩人も喜びて都へ立歸れりとなり。



吉野静(本三番目)

役別	装束附
シ テ 静 御 前	面孫次郎 静烏帽子 鬘 鬘帶 着付箔 長絹 緋大口 腰帶 扇
ワ キ 佐 藤 忠 信	着竹段野斗目 白大口 腰帶 掛素袍 小刀 扇 笠

吉野静

<sup>日記</sup>  
 加極ふは者ハ判官殿の山内は佐平  
 依者忠信よてハ扱も我君判官殿ハ  
 当山を頼こふ統りふよ。又流統の  
 心算り有に由り。今判官殿く当山を  
 扱きにては其も供や毎うりしを

吉野静



残り留り防矢はれとの事おす。残り留り防矢はれとの事おす。らう矢おとの面目とな一人とさるまてい又大々練者にして尻尾の詮議の由中ら復よを越へ皮バヤと存い狂言出シカク是れ送者にしていれ會のりはあとも存せよとい免有うまらにていシカク

上は一辨なきは終はは中あらせ  
流しき由シカク 十二騎とて  
流していシカク 将。十二騎とて中も  
余の勢方百騎二百騎とも向う  
と極よ中ら部の者あふを信し  
上はいとい寺も宿坊も難なく

三十一



おかしき御書も〜おかしき御書も

<sup>ツ上</sup>けよ六巻も角も 四半らひそ

吉野山キチ〜

安か判安の後の訶めと恐しや

お帳中シのせん〜

<sup>ヨ上</sup>おかしき御書も忠信が其契約とたが

いと家の形が味かき結らひおに

進オソと待たれは 是コ死は都府者

にせよ都府の法樂の由承り下向道を

忘れては建トもの法樂成へん入らぬ

舞を早めり 何シの人の愛

なりや我経はるミナ狭き事世上







人の教ひは依る威とまの人の又  
 神は加護によれり  
 彼別波ハ神迹をまの朝家と  
 敬む 頷る忠勤を挺んで私  
 願之更なる人獲やすとも神  
 心志の政はまの徳をなすを

とて 日 月 星 斗

神が教の政は 誓く徳のたはし  
 まし 義經を守り終くと行るぞ  
 哀成が心 柳京村が其徳をの  
 水とを思へば波もや流るるあり  
 波瀾の逆指をえんと浮舟の橋系が  
 中車よも願義おていさる されば



義経の志は海をこぎ野の神に  
 誓ひの真あらば、軽舟もさぐり  
 志され義経、怒火の勅と交洛陽  
 の西南は是分洞と成べし、法ゆら  
 當山は流統をめぐり、東路し  
 改依留仲の神よ、恵を懐きあふ

べし、おかりしこそ忠なる、流統の  
 流統中子、程慢り  
 深うして、進んで進然法も  
 其名ゆある人こそ、付とる光中  
 はん、子母坊、虎統等の尾、徳忠信ハ  
 ならびか、紀精をよ、人こそ、防矢



射られ給ふなと活きかたを實に成徳  
申すすむ人かたなりけき

綾や志川 序年

上 賤や志づ 綾乃

苧環くるまへ

日下 一 見 今 小

なまよしもろか

上 上 木 なる 花 の

面白さふ 時刻をうけして

進まぬも有けり又判官の武勇  
怖まへよ 義経をばあどかせ  
と全儀をくふる成徳も有けり  
去程子時梅川てまづ春も今も  
か買丸謀ふ難なく君をばあ  
か静よ 新成就して又故へ我



海にけれ

松 風

梗概 (所) 攝津

(季) 九月

中納言行平須磨の浦に三年程謫居の徒然の折、所の養人姉妹を選び名をも松風村雨と召されて寵愛しけるに行平都へ歸りて程なく世を去りぬ。諸國一見の僧此浦に來りしに一本の松に短尺のかゝれるを見て古の事を思ひ出でて行平松風村雨の跡を吊ひけるに姉妹の靈現はれ、行平の篋の衣裳を着し昔を忍ぶ妻執のゆめ、跡吊らはせ給へとして立去ると思へば僧は夢よめて、松吹風の音のみ残りぬとぞ。



松 風 (本三番目)

役別	シテ 松風	シテツレ 村雨	フキ 旅僧	装束附
作物	面孫次郎 髷 髷帶 着付箔 腰巻 縫箔 腰帶 白水衣 扇 (物着ニテ風折烏帽子 長絹)	面小面 其他シテ同様 (扇不持) 水桶	着流	松並木 汐浪車

松 風

<sup>ひよ</sup> <sup>上</sup> <sup>死</sup>  
 須磨や<sup>ス</sup>明石の浦<sup>マ</sup>悠<sup>ア</sup>ひ<sup>カ</sup>く月<sup>シ</sup>  
 諸<sup>モ</sup>君<sup>ト</sup>ふ<sup>イ</sup>か<sup>イ</sup>う<sup>イ</sup>よ<sup>イ</sup> 是<sup>ハ</sup>諸<sup>君</sup>玉<sup>見</sup>の  
 僧<sup>ニ</sup>にて<sup>ハ</sup>我<sup>未</sup>西<sup>園</sup>を<sup>コ</sup>ん<sup>ぞ</sup>む<sup>ハ</sup>程<sup>ふ</sup>  
 け<sup>ハ</sup>秋<sup>思</sup>ひ<sup>立</sup>玉<sup>に</sup>下<sup>り</sup>須<sup>磨</sup>の<sup>明</sup>石<sup>の</sup>  
 の<sup>月</sup>を<sup>も</sup>眺<sup>め</sup>む<sup>や</sup>と<sup>思</sup>ひ<sup>し</sup>下  
 漸<sup>ハ</sup>







なまこあひつ

ついで女  
五股上  
汐汲車わらわ

なる。おのちかへいもさうおのち

浪うな友とも科かやままぬぬの浦うら 月つき

ぬらにに使つかう那な 秋あき別わかる

須す人のひとの 月つきはは秋あき汐しほをを汲ひうう

心こころづくしづくしはは秋あき風かぜ海うみをを汲ひうう

彼かれのの平ひらのの中なか納なえ 関せき吹ふ越こると

詠うためめ終しまふふ浦うらはは浪なみののよよるるくくはは実まこと

音ね近ちかたた築つくのの家いえ里さと離はなれれるる海うみのの路みち

の月つきよよのの外ほかにに友ともももなないい 月つきよよのの外ほかにに友ともももなないい

其その友とものの業わざ形かたちががらら跡あとももたたななりりてて業わざ

小舟こぶねはは渡わたりり行ゆくく世よのの中なかにに











ちやうなきし 汲氣あれや 舟く 塩田  
 心をよちのこなき 舟人 舟く 秋  
 のこぎぶらん 松崎や 小崎の  
 登の月をたふ 影を汲 舟ん あれ  
 く 運ぶ 舟を 舟 陸奥の  
 其名や 子賀の 塩電  
 残が

塩本を運び 阿漕が 浦より 汐  
 其 舟勢の 海に 二見の 浦ぬらび  
 世ふとも あたや 松の村 立ち 残む  
 日 汐路や 舟をく なるみ ぐさ  
 夫の 鳴海 深 渡 舟尾の 松 陰よ  
 月 舟を 隠れ 舟の 舟  
 灘の 汐











一 宿屋に宿りて ちかき宿に宿りて  
かきまのり ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて

ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて  
ちかき宿に宿りて ちかき宿に宿りて



やあらうもや<sup>上</sup>ら<sup>キ</sup>平松尾村<sup>ト</sup>の  
事<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>て<sup>ル</sup>ゆ<sup>ニ</sup>二人<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>う<sup>ラ</sup>む<sup>ル</sup>愁<sup>シ</sup>傷<sup>ケ</sup>の  
是<sup>レ</sup>何<sup>ト</sup>も<sup>カ</sup>た<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>に<sup>テ</sup>ゆ<sup>ク</sup>

上<sup>レ</sup>て<sup>ル</sup>笑<sup>ハ</sup>や<sup>ト</sup>心<sup>ト</sup>内<sup>ト</sup>ふ<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>笑<sup>ハ</sup>介<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>歌<sup>ハ</sup>れ  
侍<sup>ト</sup>ら<sup>ム</sup>も<sup>ト</sup>や<sup>ト</sup>海<sup>ト</sup>庭<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>ら<sup>ム</sup>事<sup>ト</sup>  
疎<sup>シ</sup>遠<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>も<sup>ト</sup>あ<sup>ル</sup>人<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>物<sup>ト</sup>語<sup>ト</sup>録<sup>ト</sup>り<sup>ム</sup>

懐<sup>ク</sup>う<sup>ラ</sup>侍<sup>ト</sup>ら<sup>ム</sup>ひ<sup>テ</sup>程<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>端<sup>ト</sup>の  
洞<sup>ト</sup>二<sup>ト</sup>度<sup>ト</sup>袖<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>ぬ<sup>ラ</sup>う<sup>ラ</sup>侍<sup>ト</sup>ら<sup>ム</sup>

され<sup>ル</sup>も<sup>ト</sup>程<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>端<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>後<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>  
今<sup>ト</sup>は<sup>シ</sup>世<sup>ト</sup>ふ<sup>ル</sup>人<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>詞<sup>ト</sup>な<sup>リ</sup>又<sup>ト</sup>海<sup>ト</sup>庭<sup>ト</sup>の<sup>ト</sup>  
方<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>な<sup>リ</sup>う<sup>ラ</sup>あ<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>麻<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>い<sup>ハ</sup>う<sup>ラ</sup>振<sup>ト</sup>  
よ<sup>ト</sup>も<sup>ト</sup>名<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>ら<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>あ<sup>ル</sup>人<sup>ト</sup> 何<sup>ト</sup>と<sup>ハ</sup>名<sup>ト</sup>を<sup>シ</sup>



なのみき

コト

中コトの車二人コトよぶ

ふ名ふり

つぎ

飛つぎのやうさんと

まればこころらふ事と人となん

何スもの世ふ改らてはつる海乃

うらめウかりける契ヒりうあハ

はとクドキ何キもあめいこもキあま

るぼるルクク書カふフのノ松マツ尾オ下ノ

亡ナキ法アハとハれルあハらセつル松マツ尾オ村ムラぬニ人ヒト

の女メけケ満ミ美ミ是シとト来キりリたタ里サ扱アもモあアまマ

之シ年ネ乃ノ程ハはハ法ハきキぐグのノ清スミ松マツ扱アびビ

月ツキふフ心ココロはハ決ケすスのノ浦ウラ乃ノあア汐シをヲ運ハぶブ

延ノボきキがガ女メにニ姉イモ妹イモ探サれレ来キらラせセ川カハ



村のまぬけ屋敷あり  
 中へ 塩焼衣文  
 村のまぬけ屋敷あり  
 行年勤王の  
 幾程なきて世を  
 幾程なきて世を

弦ひぬき  
 ちにてとも  
 まつ尾を村も  
 やなまにも及ぬ  
 あやういふ  
 弦へ



カルク  
 ぐんぐん先之訓衣のこの日此  
 一かた  
 後  
 なまのよあられ消し暮るる  
 ク  
 下セ  
 哀古しを思ひかき懐りや  
 アハレイニ  
 仍平の中納言二年愛ふまよあ  
 浦上より強ひしふけ程の逢道とて  
 カタミ

立馬帽子将衣を  
 ともはそとつる度と  
 美末に踏ぶ家のあるも  
 あそ何ぢれあや  
 なれそあく  
 詠も理や  
 コトワリ  
 ヤ  
 モ



上シテ骨ハネにヨロ従ツてコのメぬカり衣付テ

日ヒ惣カケてモ軽カむ同じ世ふ任ひのらぶ

我ワを忘れ形をなすと捨テも

我ワを忘れ形をなすと捨テも

日ヒ惣カケてモ軽カむ同じ世ふ任ひのらぶ

為シ方方潤潤む伏港港むりを悲し死物着

下下之シ津津川川終終えぬ海海の浮津津もしるる

恋恋の淵は有きり 恋恋は有きり

松松は有きり 松松は有きり

浅浅るるやた様様の心故故よそ恋恋の心

深深もも港港とと終終は有きり 深深もも港港とと終終は有きり

深深もも港港とと終終は有きり 深深もも港港とと終終は有きり







仕上 周<sup>し</sup>邊<sup>へ</sup>の<sup>や</sup>山<sup>の</sup>は<sup>な</sup>峰<sup>の</sup>は<sup>な</sup>生<sup>か</sup>き<sup>の</sup>松<sup>の</sup>と<sup>し</sup>は<sup>な</sup>を

日中 今<sup>い</sup>海<sup>の</sup>り<sup>ん</sup>ん<sup>ん</sup> ま<sup>い</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>な</sup>の<sup>を</sup>山<sup>の</sup>松<sup>の</sup>

そ<sup>の</sup>な<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>君<sup>の</sup>愛<sup>は</sup>は<sup>な</sup>浪<sup>の</sup>た<sup>る</sup>浦<sup>の</sup>ま<sup>の</sup>

松<sup>の</sup>の<sup>り</sup>平<sup>な</sup>立<sup>ち</sup>海<sup>の</sup>り<sup>こ</sup>は<sup>な</sup>我<sup>も</sup>も<sup>も</sup>後<sup>は</sup>よ

い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>で<sup>で</sup>磯<sup>の</sup>別<sup>の</sup>松<sup>の</sup>の<sup>の</sup>懐<sup>の</sup>う<sup>や</sup> 瑞々

サ<sup>サ</sup>ル<sup>ル</sup> あの上 松<sup>の</sup>は<sup>な</sup>吹<sup>き</sup>来<sup>る</sup>風<sup>も</sup>狂<sup>じ</sup>て<sup>は</sup>浪<sup>の</sup>の<sup>の</sup>波<sup>の</sup>

ま<sup>げ</sup>い<sup>い</sup>あ<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>ぐ<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>我<sup>の</sup>親<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>よ

え<sup>え</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>な<sup>な</sup>り<sup>り</sup>我<sup>の</sup>泣<sup>き</sup>予<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>た</sup>が<sup>あ</sup>い

い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>海<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>海<sup>の</sup>浪<sup>の</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>浪<sup>の</sup>の<sup>の</sup>浦<sup>の</sup>

浦<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>吹<sup>き</sup>や<sup>う</sup>し<sup>し</sup>浪<sup>の</sup>の<sup>の</sup>山<sup>の</sup>お<sup>お</sup>ら<sup>ら</sup>し

閑<sup>か</sup>踏<sup>た</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>声<sup>の</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>も<sup>も</sup>路<sup>の</sup>な<sup>な</sup>く

夜<sup>の</sup>も<sup>も</sup>明<sup>め</sup>て<sup>て</sup>村<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>だ<sup>だ</sup>れ<sup>れ</sup>は



松尾むらりや跡くらん

中

一

江口

梗概 (所) 攝津

(季) 九月

江口の君の靈西行法師と歌詠みかわしたる昔語りをすも事を作る是は西  
行の書ける撰集抄に書寫の性空上人正眞の普賢菩薩を拜みたと祈  
念しけるに我を見たくは室積ムロツキの遊女を見よとの靈夢を蒙りしかば即ち江口  
桂木などいふ遊ひの里に行て目をふさぎ心を静めて見給へば江口の君は白象  
の上に普賢菩薩と現じて座し居給へりといふ物語りによりて作れるなるべし







旅を立てて 溪の川も亦  
鶉の昔れやのま 松乃煙  
の浪よまをる 江にれ里も亦  
乃里よもてふ けねにて江の長れ  
旧跡と尋うるふ けい  
急ゆ程よそい 江に

上 扱は是成が江の君れ跡なるや  
生身は中ふ程もあれども名は  
とを悔りて今述も昔迹の旧跡を  
今もる事の家まゝ 実や西行  
法師は知よて一衣の宿をかきけるふ  
主の心なるも 世は中を御ふ











笑ハ彼の宿<sup>カ</sup>ふとむじなとあふ斗<sup>コ</sup>を  
とむあし捨人<sup>ト</sup>を味<sup>イ</sup>めやそ女の  
やどりに<sup>上</sup>とあきらめとあきらなら  
まや<sup>コ</sup>実<sup>コ</sup>理<sup>コ</sup>なう<sup>コ</sup>雨<sup>コ</sup>行<sup>コ</sup>も<sup>コ</sup>彼<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>宿<sup>コ</sup>  
まを捨人<sup>ト</sup>とし<sup>ト</sup>け方<sup>コ</sup>ハ名<sup>コ</sup>ふあ  
笑<sup>イ</sup>好<sup>コ</sup>の家<sup>コ</sup>は<sup>コ</sup>か<sup>コ</sup>〜<sup>コ</sup>母<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>人<sup>コ</sup>

志<sup>コ</sup>き<sup>コ</sup>ぬ<sup>コ</sup>車<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>多<sup>コ</sup>き<sup>コ</sup>宿<sup>コ</sup>と<sup>コ</sup>心<sup>コ</sup>  
とむなと味<sup>イ</sup>めふ<sup>コ</sup>捨人<sup>ト</sup>を  
思<sup>コ</sup>ふ<sup>コ</sup>心<sup>コ</sup>ある<sup>コ</sup>味<sup>コ</sup>惜<sup>コ</sup>む<sup>コ</sup>あ  
この<sup>コ</sup>味<sup>コ</sup>惜<sup>コ</sup>む<sup>コ</sup>そ<sup>コ</sup>ま<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>飯<sup>コ</sup>れ  
宿<sup>コ</sup>なる<sup>コ</sup>に<sup>コ</sup>あ<sup>コ</sup>や<sup>コ</sup>惜<sup>コ</sup>む<sup>コ</sup>とい<sup>コ</sup>ふ  
波<sup>コ</sup>の<sup>コ</sup>ぬ<sup>コ</sup>ら<sup>コ</sup>ぬ<sup>コ</sup>た<sup>コ</sup>今<sup>コ</sup>も<sup>コ</sup>捨人<sup>ト</sup>の











下<sup>シ</sup>女<sup>メ</sup>一<sup>ツ</sup>ウ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ハ</sup>野<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>一<sup>ツ</sup>花<sup>ハ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず

も<sup>も</sup>波<sup>ハ</sup>も<sup>も</sup>表<sup>ハ</sup>世<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>な</sup>か<sup>ら</sup>ず

上<sup>リ</sup>見<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>夜<sup>ハ</sup>や<sup>な</sup>月<sup>ハ</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>水<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>面<sup>ハ</sup>も

抱<sup>キ</sup>女<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>中<sup>ニ</sup>も<sup>も</sup>一<sup>ツ</sup>見<sup>ル</sup>ひ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず

た<sup>ら</sup>る<sup>人</sup>船<sup>ハ</sup>も<sup>も</sup>誰<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>船<sup>ハ</sup>や<sup>ら</sup>ん

上<sup>リ</sup>女<sup>メ</sup>何<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>船<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>待<sup>タ</sup>が<sup>レ</sup>船<sup>ハ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず

古<sup>ク</sup>の<sup>ハ</sup>江<sup>ハ</sup>に<sup>レ</sup>抱<sup>キ</sup>女<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>川<sup>ハ</sup>道<sup>ハ</sup>も<sup>も</sup>遠<sup>ク</sup>乃<sup>シ</sup>

月<sup>ハ</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>を<sup>レ</sup>待<sup>タ</sup>せ<sup>よ</sup>そ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず

江<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>抱<sup>キ</sup>女<sup>ノ</sup>と<sup>も</sup>ま<sup>は</sup>ら<sup>ず</sup>あ<sup>ら</sup>ず

上<sup>リ</sup>女<sup>メ</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>に<sup>レ</sup>待<sup>タ</sup>せ<sup>よ</sup>月<sup>ハ</sup>は<sup>は</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>ら</sup>ず

ら<sup>あ</sup>あ<sup>あ</sup>我<sup>レ</sup>ら<sup>も</sup>一<sup>ツ</sup>見<sup>ル</sup>ひ<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず

あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>に<sup>レ</sup>待<sup>タ</sup>せ<sup>よ</sup>あ<sup>ら</sup>ず



おかしなあはれ  
まじやまじ

むかしや  
秋の氷にまじり

落ちてきつめの  
月も影さる

小謡  
舞の身  
たぐや調うさかあ

哀れ者の意しを今も抱女

の身抱ひ世を渡る一筋を覗ひて

いざや抱だん  
ま十二個縁の

流傳の車の音はあぐるが如く

多の林を抱ぶは似たり  
お生

又あはれ  
あつて生みの前を知らず

来世は来世又も世をなほ  
とを

あふ事な  
或ひは人仲



天<sup>ニ</sup>上<sup>ノ</sup>の<sup>ニ</sup>苦<sup>シ</sup>果<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>ら<sup>ズ</sup>く<sup>ト</sup>し<sup>ム</sup>も  
 顛<sup>ニ</sup>倒<sup>ス</sup>速<sup>ニ</sup>妾<sup>ト</sup>し<sup>テ</sup>い<sup>ハ</sup>ま<sup>シ</sup>解<sup>ケ</sup>脱<sup>ス</sup>の<sup>ノ</sup>程<sup>ヲ</sup>を  
 柱<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>或<sup>レ</sup>途<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>難<sup>ク</sup>の<sup>ノ</sup>悪<sup>ク</sup>報<sup>ヲ</sup>よ  
 隨<sup>ヒ</sup>て<sup>ハ</sup>患<sup>ニ</sup>に<sup>シ</sup>ら<sup>ズ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>殊<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>  
 費<sup>シ</sup>心<sup>ヲ</sup>の<sup>ノ</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>ち<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>失<sup>ハ</sup>か<sup>ス</sup>  
 女<sup>ヲ</sup>も<sup>ハ</sup>我<sup>レ</sup>も<sup>ハ</sup>た<sup>ラ</sup>ま<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>笑<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>

人<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>ら</sup>た<sup>り</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>日<sup>ノ</sup>罪<sup>ヲ</sup>  
 深<sup>キ</sup>身<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>生<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>例<sup>ト</sup>も<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>ず  
 河<sup>ノ</sup>竹<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>流<sup>ル</sup>ま<sup>の</sup>女<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>なる<sup>ル</sup>前<sup>ニ</sup>は<sup>ハ</sup>世<sup>ノ</sup>の  
 報<sup>ヲ</sup>ひ<sup>て</sup>速<sup>ニ</sup>思<sup>ヒ</sup>ひ<sup>や</sup>る<sup>ル</sup>我<sup>レ</sup>地<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>  
 紅<sup>ク</sup>花<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>春<sup>ニ</sup>朝<sup>ヲ</sup>に<sup>ハ</sup>彌<sup>々</sup>縞<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>花<sup>ノ</sup>ひ<sup>を</sup>  
 な<sup>ら</sup>ず<sup>ニ</sup>と<sup>シ</sup>ん<sup>ん</sup>え<sup>し</sup>も<sup>ハ</sup>夕<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>も<sup>ハ</sup>誘<sup>ハ</sup>ひ<sup>ま</sup>す



貴客の秋は夕。貴嶺嶺の林を  
 含むもいづも朝の霧よ川らふ  
 中 松風狂月ふ月をかきつ 嶺客も  
 きて来る事もなく 羽長紅圍  
 お枕と双べ 妹背もい川のるふら  
 隔川らん 心ある草は 情ある

人倫何きまれを 遊るべき 形  
 思ひ知ながら 或時笑ふ  
 貧者の思ひ浅から 又或時  
 声をとて 世物の心は 深きと  
 口ふ言ふ 女探れ 縁となるもの  
 実や 皆人とし 花の境よ 夢ひ

マフ

ト



ノ根の羅を伴る車もらんるらゆくと  
上

お迷ふか成り  
面白や 序舞

上 しと女 實れ海漏の大海よふ葉六欲の風は

吹ねども 頭南 随縁も如の波は

またぬ日もある  
あちちを何故ぞ 恨なる宿に

ん しと女 ひとむら故 日上 ひとあまの母も

あらじ しと女 人をも慕は 日上 待

昔もななく しと女 別れ路もいらしく

日上一 しと女 花よ如葉の月さのぬるともあら

よーあや しと女 ねもへを恨れ宿

日上一 しと女 思へ仮の宿ふ しと女 ひとむらと人をたよ




中一え一トノ、一ラ入、一タ、一ト、  
 凍め、我なるは是、迷なりや、悔るとして。  
 別ち、者、負、其、後、と、歌、を、れ、和、を、  
 向、象、と、な、り、は、る、光、を、り、と、た、ふ、白、妙、の、  
 向、象、と、な、り、は、る、光、を、り、と、た、ふ、白、妙、の、  
 有、難、く、そ、を、免、え、た、る、者、難、く、そ、を、  
 松、が、也、き、

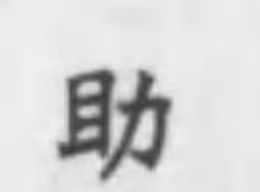
昭和四年四月五日印刷  
 昭和四年四月十日發行

著作権  
 許不製複



訂正者  
 甘三世

金剛右  


發行兼  
 檜常之助  


發行所  
 東京市神田區錦町二丁目拾番地  
 合資  
 檜書社

京都市二條通麩屋町東北角  
 檜書店京都出張所





終

